

願生淨土

— 三願的証 —

神 戸 和 磨

一

『淨土論註』を尋ねていくと、世親の「願生偈」が五念門の行、往生淨土の行として示されている。礼拝門、讚嘆門、作願門、觀察門、廻向門である。

「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」の「帰命」は礼拝門、「尽十方無碍光如来」は讚嘆門、「願生安樂国」の一句は作願門、そして、次の「觀彼世界相」以下は觀察門、最後の「我作論説偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安樂国」の四句は廻向門となっている。

その五門のうち、はじめの四門は自利の行、第五の廻向門は利他の行である。その自利利他の行が成就して、安樂淨土に往生することができるといわれている。その往生淨土の行の廻向のところでは、「普くもろもろの衆生と共に、安樂国に往生せん」という偈文を釈して、論主が共に安樂国に往生せんと願われた衆生はどういう衆生かと問い、「八番問答」が示されている。

そこに無量寿仏の名号を称讚し、聞信する諸仏称名の願（第十七願）、念仏往生の願（第十八願）が連引されている。

「十方洹沙の諸仏如来、皆ともに無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。諸有の衆生、その名号を聞て信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心廻向したまへり、彼の国に生ぜんと願は即ち往生を得て不退転に住せんと、唯だ五逆と誹謗正法を除くと」これを案じて言く、一切外道凡夫人、皆往生を得ん。

無量寿仏の名号の讚嘆、信心歡喜の廻向の信による「一切外道凡夫人」の救済の道が示されている。

そして、下巻の最後、利行満足章のところでは、五念門の行による自利利他の仏道成就を表し、次のように結ばれている。

問うて曰く。何の因縁ありてか、「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言うや。答えて曰く。『論』に言はく、五念門の行を修して、自利利他成就するを以ての故なり。然に覈にその本を求めんに阿弥陀如来を増上縁となす。

といい、

おおよそこれ、かの浄土に生まると、およびかの菩薩・人・天の所起の諸行は、みな阿弥陀如来の本願力に縁るがゆえに。何をもってこれを言わば、もし仏力にあらざれば、四十八願すなわちこれ徒らに設けたらん。いま^{ひましく}的三願を取りて、用いて義意を証せん。

阿弥陀如来の本願力廻向を根本とする往生浄土、速得成就の仏道が、念仏往生の願(第十八願)、必至滅度の願(第一願)、還相廻向の願(第二十二願)の三願によって明らかにされている。そして、その三願の引意を結んで、
ここをもって他力を推するに増上縁とす、しからざるを得んや。

と、自力・他力の相を明らかにし、阿弥陀如来を増上縁となす願生浄土の仏道が開頭されている。

一一

曇鸞大師は自力・他力の教判をなした人である。自力・他力のことばは『論註』では、はじめの五難の所と、先に

示した巻末のところだけである。

『論註』の冒頭に、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』を、「謹んで案ずるに」とはじまっている。菩薩が不退転地を求めていく十地の歩みは、諸の困難の行を久しい間修行し歩み続けていく道である。その歩みは、常に二乗（声聞・縁覚）のさとりに堕ちてしまうという行の難（諸・久・墮の三難）である。曇鸞はさらに五種の難にひらくのである。

- 一、外道の相善は菩薩の法を乱る。
- 二、声聞は自利にして大慈悲を障う。
- 三、無願の悪人は他の勝徳を破す。
- 四、顛倒の善果、能く梵行を壊る。
- 五、唯是れ自力にして他力の持つなし。

そして、

易行道は、いわくただ信仏の因縁をもって、浄土に生ぜん願す。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得。仏力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定は即ちこれ阿毗跋致なり。

そこには龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』を、「謹んで案ずる」というように、龍樹菩薩によって賜わった易行の道、「信仏の因縁」の歓びがある。不退転地を願う仏道の推求の中で、「人、疾く、不退転地に至らんと欲せば、まさに恭敬心をもって、執持し名号を称すべし」（『易行品』）という聞名不退、念仏往生の願により必至滅度（不退転地）、初歡喜地を得ることができたのである。曇鸞は、その龍樹の看經の眼によって易行不退の道、念仏の歴史を立脚地として、この世を生きる五逆、謗法の「一切外道凡夫人」の救済されていく仏道、速かに無上仏道を成就する自利利他の道を探ね求めていったのである。

はじめの曇鸞大師がかかげた五難とは、釈尊出世の大事である「信仏の因縁」が見失われ、仏道が人間的な諸関心、

自力の菩薩行、実践、諸行の中に埋没し、流失し混迷していく状況の中に、速かに無上仏道を成ずる道を推求している。

「信仏の因縁」とは龍樹の信をもって方便とする易行道を受け、易行道を「信仏の因縁」と了解されたのであろう。信とは因、仏道の正因である。仏に成ることは人間から起こるのではなく、仏から起こる因縁によって仏になることができる道のことである。その仏因、仏を信ずる信心は、仏縁、仏の本願力に縁するという内容である。そういうところに易行道、「信仏の因縁」という他力の信の仏道了解がある。

私たちの生活の中で「他力の信」が誤解を受けるのは、他因自果、無因自果、つまり阿弥陀如来の他因によって救済されると考えられてしまうからであろう。他力の信、他力の一心は「阿弥陀如来の本願力を増上縁」となす自覚、自証の道である。ただそこに起こる仏因仏果の自証は、人間からのものではないということである。浄入願心章のところでは、

本四十八願等の清淨願心の莊嚴したまうところなるに、因淨なるが故に果淨なり、因なくして他の因のあるには非ざるなりとなり。

といわれているように、廻向の信、他力の信の領受は棚からポタ餅の「他因」、「無因」のことをいうのではなく、如来の願心の目覚めのことである。

五難のはじめに、「外道の相善は菩薩の法を乱る」、「声聞は自利にして大慈悲を障う」といわれているのは、人間の能力を標準として仏道を計っていくあり方である。釈尊が仏になったということについても、文化史上の偉人としてしか考えられないのが私たちの常識である。また釈迦といっても釈迦族の一人のひとがさったという個人のさとり、個人の悟道ぐらいにしか考えることはできない。そのように人間の能力を標準として、仏法、仏道を計り、考えていくところの難である。

そして他の二つ、「無願の悪人は他の勝徳を破す」、「顛倒の善果はよく梵行を壊す」といわれているのは、三宝に帰依することのない人間の問題といえる。『観経』にでている十悪、五逆の愚人である。經典にでてくる提婆、闍世という人間像である。釈尊の説かれた一代教を無意味にし、ご破算にしてしまう煩惱具足の人間の問題である。

そのように曇鸞は、龍樹菩薩の易行道、「信仏の因縁」の立脚地において、自らの生きる現実、時代状況を五難によって表すのである。仏の因縁の中で仏道が「乱」れてしまったこと、釈尊出世の大事が覆われ、「障」りになってしまっている。人が帰依するものを見失う中に三悪趣の中に埋没し、人が争い、潰し合う。尊ぶものを「破」っていく人間のあり方。そして、自らの幸福追求に窮々として、人間自体を見失い、人と人とが分断され、バラバラに生きていく。そういう破「壊」の現実、人間のあり方を凝視する中に、「ただこれ自力にして、他力の持つことなし」と、仏道そのものが問い直されてくるのである。

三

易行道は、いわくただ信仏の因縁をもって浄土に生ぜん願ず。仏願力に乗じてすなわちかの清浄土に往生を得。仏力住持して即ち大乘正定の聚に入る、正定は即ちこれ阿毗跋致なり。たとえば水路に船に乗ずればすなわち樂がごとし。この『無量寿経優婆提舍』はげだし上衍の極地不退の風航なるものなり。

龍樹の『十住毘婆沙論』は、初地の歡喜地、二地の離垢地までしか積されていない。安田理深師は初地の不退転地が明らかになれば、釈義する必要はなかったであろうといわれる。曇鸞は易行道開頭の「信仏の因縁」の目覚めのところから、世親の『十地経論』、『無量寿経優婆提舍願生偈』を尋ねたのである。そして、仏道の歩みである十地、菩薩の修道の自利利他の課題の解答を、「願生偈」に見出したといえる。

観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海故

不虛作住持功德を積するところにおいて、曇鸞は次のように問い、仏道の虚作の相を超える了解を述べている。ここでは『吳越春秋』、『魯子春秋』によって、人を信じ食事や金を与えて一生懸命に人を養ったが、信じていた男に裏切られた例話、大金を持った身にあまる境涯にいた人が、権勢が変わる中で大金を没収され、餓死してしまったという記述がある。それらはこの世の悲しい運命をいっているのではなく、それぞれの宿業を生きる人間がみつめられているといえるだろう。その宿業、業報の大地に立って迷いを超える十地の仏道が問題にされている。十地の道を知的に解釈するのではなく、業報の場所に受けとめる道が尋ねられている。

龍樹菩薩・婆藪槃頭菩薩の輩、彼に生ぜん願ずるは、まさにこれがためなりとならくのみと。問うていわく。『十地経』を案ずるに、菩薩の進趣階級ようやく無量の功勳ありて、多劫数を逕う、しかしてのちいましてこれを得。いかんぞ阿弥陀仏を見る時、畢竟して上地の諸菩薩と身等しく法等しきや。

龍樹菩薩、世親菩薩がどうして浄土に願生を願われたのか。その事柄を『十地経』を案ずるに」と、菩薩修道の十地の歩みの中に一つの問題が確かめられているところに注意される。十地のところの問題点は後に述べることにして、曇鸞は菩薩の十地の階次を次のように帰結していくのである。

十地の階次というは、これ釈迦如来閻浮提において一の応化道ならくのみ。他方の浄土はなんぞかくのごとくならん。五種の不思議の中に仏法最も不可思議なり。もし菩薩かならず一地より一地に至て超越の理なしといわば、いまだかつて詳らかならず。

十地の階次とは、「釈迦如来がこの世においての一の応化道を示してくだされた教えにほかならない」。釈迦の応化道を理想とした修道の歩みであって、「他方の浄土」、阿弥陀仏の浄土はかならずしもそうではないのだと。一地より一地に進級していく歩みを理想とするというならば、それは「超越の理」を知らないということであるといえる。

釈迦如来の一応化道を理想とする十地の歩みとは、もちろん小乗のように釈尊を理想の人格として仰ぐことではない。釈尊は生死を厭い涅槃を得られた。苦集滅道の四諦によって、生死の苦悩を滅して涅槃を得た人である。しかし、大乘では、その得られた涅槃、平等法身をこの世に苦悩する衆生に得させようと衆生済度のために永劫に涅槃に入らないと修行されているというのである。願作仏心は度衆生心、度衆生心は願作仏心と、菩提心は限りなく展開し、完成していく道を歩むのである。

その意味では、菩薩の十地の歩みとは釈尊がこの世に出興された意義、法身の目覚めを人類の歴史の中に見出し、誰しもが共有している平等法身を仏陀と同じように見出し、完成していく解脱の歩みのことにほかならない。釈尊の成道が、釈尊だけの意義にとどまらない、人類を包む法身の発見であることにおいて、すべての人の解脱を求めて歩む道のことである。

その道を完成していく歩みが十地の段階で表されている。真如、法身を見、修道していくのである。その道の歩みは曇鸞がいうように無反無復を許さない、反復と練磨の道である。その道は第六地、現前地において般若が現前してくるところで完成するのであるが、般若・空の現前のあるところで空に腰をおろしてしまうという、七地沈空の難がある。有漏心、作心の為に空に沈むという難である。その難が『論註』では、

菩薩七地の中において大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず、仏道を捨てて
實際を証せんと欲す。

といわれている。人間の努力、作心によって般若、空を得たといえ、仏道の目的を失い、無為、無作心の中に自身が沈んでしまうということである。

「未証淨心の菩薩」とは、初地已上七地以還のもろもろの菩薩なり。この菩薩、またよく身を現すること、もしは百、もしは千、もしは万、もしは億、もしは百千億、無仏の国土にして仏事を施作す。かならず心を作して三

味に入りて、いましよく作心せざるにあらず。作心をもつてのゆえに、名づけて「未証淨心」とす。

といわれている。有仏の国土に仏、諸仏を求め、無仏の国土の限りなき衆生を度する菩薩の修道の歩みである。仏道の志願は、すべての人の救いの道である。自分だけの有仏の国土の救いとどまらない。無仏の国土に身をおき、仏、菩薩の願いに生きることへの要請である。そのような願いを肩に背負い、作心によって立とうと願うのであれば、願った人間の方が、その願いの大きさに負けてしまふといえるだろう。自力の廻向、作心をもって作心を越えていくのである。自らの作心によってさとしたところの無為の境地にも停らず、三悪趣にも埋没せず越えていくのである。たとえ、その歩みの願いに負けても、立ち上って歩めという。龍樹は『十住毘婆沙論』の中で敗壞の菩薩ということを用いて、そのことをたとえて、最弊の悪馬といっている。「馬の名のみあって、馬の用あることなし」といわれている。人がもし敗壞の菩薩になったならば、悪法を除いて、よく精進して阿惟越致を求めよといっている。

『華嚴経』「十地品」には、その七地を超える課題が、次のようにいわれている。

三、界を遠離して、しかも三界を莊嚴し。畢竟してもろもろの煩惱の縁を寂滅して、しかも衆生の為に貪恚癡の煩惱の縁を滅する法を起こし。……一切の仏の国土は、空なること虚空の如く、みなこれ相を離ると知りて、しかも国土を淨むる行を起こし。一切の仏の法身は、身無しと知りて、しかも色身の三十相、八十種好を起こし、もつて莊嚴し。

（『国訳大蔵経』二五八頁）

といわれ、さらに、

仏子よ、たとえば二つの世界のごとし。一は定めて清淨にして、一は定めて垢穢なり。この二つの中間は、得て過ぐべきこと難し。この世界を過ぎんと欲せば、まさに神通および大願力をもってすべし。（同前二六一頁）
ともいわれている。

大変な課題であることがよく知られる。そのような仏道の課題を曇鸞は、不虛作住持功德の例話にあったように、

人の業縁の場所、親しんでいた人間関係が争い、殺し合いになっていく宿業を生きる現実を押える中に、願作仏心、度衆生心の仏道を尋ねていったのである。そのような推求の中で現実をみつめた眼は、「わが身は智慧あさくして
いまだ地位にいらざれば 念力ひとしくおよばれず」（曇鸞讚）と語っている。自力によって不退転地を求めたのであるが、「わが身は智慧あさくして」と、わが身の念力は法身を見ようとするのであるが、自我の念、差別の相から
でられない自己をみつめている。そのように人間の限界点を知る中に、未得淨心の身がいかに無功用、自然の心を得ることがでるのだろうか。一生補処の位に立つ八地の不動地、十地の法雲地、淨心、上地の菩薩の功徳を得ることができると尋ねていくのである。

その仏道の課題を曇鸞は、世親の『淨土論』、つまり、『大無量寿経』に照らした菩薩の十地の歩みの了解を通し、
問うて曰く、……云何が阿弥陀仏を見る時、畢竟して上地の諸の菩薩と身等しく法等しきや。

と尋ね、一応化道を超える「見阿弥陀仏」、不虛作任持功徳の本願力のはたらき、つまり本願力廻向の自覚に往還の二相を見出してくるのである。

曇鸞にそのような仏道の眼をあたえた世親の仏道了解は、次のような簡潔な一文である。

言ニ觀仏本願力遇無空過者能令速満足功徳大宝海一故。

即見ニ彼仏ニ未証淨心菩薩畢竟得ニ証平等法身、与ニ淨心菩薩ニ与ニ上地菩薩ニ畢竟同得ニ寂滅平等一故。

四

未証淨心の菩薩と淨心の菩薩の掛け橋は、人間の発願、自力の作願、廻向においては越え難いところであった。
曇鸞は、

「願生安樂國」は、この一句はこれ作願門なり。天親菩薩の歸命の意なり。

といい、さらに、願生については、人間の三有虚妄の生に対して、

阿弥陀如来の清浄本願の無生の生なり。

といわれている。「無生」とは真如、法性、涅槃のことである。「生」とは三界雑生の生であり、宿業の生である。自然、無生が本願によって生として莊嚴されるのである。そのような経験は人間の生の延長ではない。人間の場所に人間を超えた経験、得生の情が起こるのである。そのような不可思議の経験がどうして起こるかということである。そういう願生心の転回のところ未証浄心の菩薩、浄心の菩薩の課題があるといえる。

仏道は、やはり人間の作願、発願にはじまる。この世に出興された応化身の仏陀を理想として、人類の解脱の平等法身を求めようとする。それが「観仏」、止観の道である。いい換えれば、仏の教化に仏のさとりを目的表象として、一步一步登りつめていく道のことである。自力の如実修行の道である。仏への作願、観察、廻向の菩薩の道、目覚めの道である。

そのような歩みは、『十地経論』の中に、聞慧、思慧、修慧をもって表されている。聞慧とは仏陀のさとられた真如、法を聞くことによって智慧を見出す道である。聞くということは、水を飲むように「受け持つ」ことだといわれている。思慧とは教えを受けよく考え、思索することである。それは食物を咀嚼するように歩む力であると。法身の食物をよく噛み、生活の中で確かめていけば「智慧の力が助成」され、自ずと智慧によって歩む力が養われる。また、修慧とは教えを体験し「煩惱の習患を遠離する」ことである。長い煩惱の習患、影響力を転じて、仏の智慧に導かれていくことである。そして煩惱障、分別障を対治していく。その真如体験の歩み、修道が初歡喜地、離垢地……現前地、不動地、法雲地と示される。その道は、願作仏心・度衆生心の自己と衆生の解脱が求められていくのである。

この世の苦悩の衆生に平等法身を教えてくだされた仏陀の教化に修行していく道のことである。「如実に奢摩他(止)を修行せんと欲するが故に」、「如実に毗婆舍那(観)を修行せんと欲するが故に」という止観の道である。

「観仏」とは、そのような如実修行の道である。『浄土論』の中には、浄土莊嚴のところに「観彼世界相 勝過三界道」、仏莊嚴のところに「観仏本願力 遇無空過者」といわれている。また同時に廻向門のところでは、「願見弥陀 普共諸衆生 往生安樂國」といわれている。

「観仏」、仏の教化に仏のさとりを求めていく中で、未証淨心の自覚とは人間からは仏は見えない、仏を証することはできないということが知られてくるのである。迷っているものが仏を証明することはできないといわれているのではないか。仏の世界は「安養淨土の莊嚴は、唯仏与仏の知見なり」（曇鸞讀）といわれているように、仏によって見られ、証せられている世界である。仏によって一切衆生を包み、何びとといえども仏ならざる人はないと、仏によって証明されている廣大無辺の世界が知られるということである。釈尊の出世本懷は、釈尊一人のさとりと、また個々々の人間の努力、能力を規準としたさとりの境界ということではなく、仏陀がみずからの成道に無数の仏の世界を見、無量の衆生がさとりをひらき仏になる世界を見出してくだされたということが、「見阿弥陀仏」といわれているのであろう。つまり、仏のさとりの背景、根元が尋ねられたのである。

先の不虛作住持功德のところでは、一応化道を見て、「見阿弥陀仏」を知らないということとは「超越の理」を知らないのだといわれていた。私たちには釈尊の形姿といっても、知られるのは歩まれた修行の段階であり、さとられたところはインドの国、閻浮提の菩提樹下であるということくらいである。そのように一応化の道、歴史は知ることができが、「超越の理」は知ることができない。その「超越の理」について、松の木の生長と好堅樹の成育の話がだされている。松は一日にどれだけ伸びたか、一寸伸びたかも分かりかねるが、好堅樹は一日に百丈も成育すると。私たちに見える仏の功德はちょうど地上の松の生長くらいにしか見えないといわれているのだらう。インドの国にひとりすばらしい人がでられたという、そのことに対しての恭敬の心くらいである。仏のさとりをこの世のすべての衆生に恵み、仏のさとりからはじまっているという、一日に百丈も伸びるといふ好堅樹、無尽藏の仏の功德はなかなか

られないのだといわれていwashないか。

そのようなさとり功德を、世親は、

帰命尽十方無碍光如来

と表白する。如来の功德はこの世の十方を尽すと讃えてくださったのである。無量寿仏の威神功德の不可思議なるを讚嘆する聞信の道、その名号の功德から無量の諸仏があらわれてくださったという、目覚めである。

それ故に、『論註』は、「観仏」、仏の教化を通して「阿弥陀仏」の歴史に帰命する道が教えられている。いま、その点を如実修行の作願の三義、観察の二義、そして廻向の二相に尋ねてみたいと考える。

作願門のところでは、『論註』に、

云何作願 心常作願 一心専念畢竟往生安樂国土 欲_レ如_レ実修_ニ行奢摩他_一故
といわれている。曇鸞はその文を釈して次のようにいう。

一は一心に専ら阿弥陀如来を念じて、彼の土に生れんと願すれば、この如来の名号およびかの国土の名号、よく一切の悪を止む。

二はかの安樂土は三界の道に過ぎたり、もし人またかの国に生れば、自然に身口意の悪を止む。

三は阿弥陀如来正覚住持力をして、自然に声聞・辟支仏を求むる心を止む。

如実の功德より生ず、この故に「欲如実修行奢摩他故」とのたまえり。

二十九種莊嚴の名声功德、清淨功德、主功德が内容となっている。

はじめは「国土の名号」であるから、いかなる衆生にも作願をあたえようという呼びかけである。み名にいかなる衆生も本願の心を聞かざるを得んものにしたという如来の作願が示されている。そして二番目には、その名号を聞くものは「三界の道を過ぎ」ていく身を得るのである。流転の中にあつて流転を超えていく正定聚の機を得るとい

のである。三番目が、「如来正覚住持力」によって自然に二乗地、自らの解脱心に停まることが止むといわれている。そのように如来の作願は私たちに「自身住持の楽」に停まることをこえさせる浄土の止観をあたえるのである。如来の住持する力が『論註』ではこのようにいわれているのが興味深い。「黄鶺の子安を持ってば、千齡かえりて起る」と。子安が鶴を一羽買ってきたのであるが、その鶴が涙を流して泣いている。聞けば母が危篤であるから最後の孝養がしたいという。子安は鶴の願いを聞いてやった。しかし、鶴が戻ってきたときには、恩を受けた子安は墓の下にいたのである。鶴は生前の恩をおもい、その墓のところでも三年間泣き、その恩を念じた。鶴の念持力によって鶴の千年の命が子安にのりうつり、子安はよみがえり、鶴は死んだという例話である。

如来の作願は、五逆・誹法・一闍提を生きる菩提心なきもの、作願なきものに呼びかけられているといえる。

また、観察門のところでは『論』に、

云何観察 智慧観察 正念観_二彼_一欲_下如_レ実修行毗婆舍那_上故

といわれている。その文を釈して次のようにいわれている。

一は此にあって想を作して彼の三種莊嚴功徳を觀ずれば、この功徳如実なるが故に、修行すればまた如実功徳を得。如実功徳は決定して彼の土に生を得るなり。

二は彼の浄土に生を得れば、すなわち阿弥陀仏を見たてまつる。未証浄心の菩薩、畢竟して平等法身を得証す。浄心の菩薩と上地の菩薩と、畢竟して同じく寂滅平等を得。この故に「欲如実修行毗婆舍那故」とのたまえり。

はじめのところでは、「此にあって想をなせ」といわれている。「此」とは穢土、迷いの場所である。そこにおいて三種莊嚴の功徳を觀ずれば、如実の功徳を得て「彼の土に生を得る」といわれている。「彼の土」とはさととり、如実の功徳は人間の生の延長でない。迷い心にさとりの心は継ぎ足すことはできない。無限は有限を延ばせばとどくというものではないということである。そのように浄心の位と未証浄心の位、仏と人間の位が「彼」、「此」によってはつき

りと示されている。この一文を読んでいると、「曇鸞讚」が思い起こされる。

四論の講説さしおきて

本願他力をときたまひ

具縛の凡愚をみちびきて

涅槃のかどにいらしめし

世俗の君子幸臨し

勅して浄土のゆえをと

十方仏国浄土なり

なによりてか西にある

鸞師こたえてのたまわく

わが身は智慧あさくして

いまだ地位にいらざれば

念力ひとしくおよばれず

一切道俗もろともに

帰すべきところぞさらになぎ

安楽勸帰のころざし

鸞師ひとりさだめたり

曇鸞大師の徳を讃えられた和讃である。『安楽集』下巻に示されている文によられていると思う。国王、世俗の君子が曇鸞大師に問われた。「十方仏国浄土なり なによりてか西にある」と。その問いに鸞師は、「わが身は智慧あ

さくして、いまだ地位にいらざれば「念力ひとしくおよばれず」と応えられたのである。真如法性の光から見れば十方仏国浄土である。娑婆即寂光土である。そのように十方浄土と教えられても、久しく生死の業繫につながれたこの身は、十方にさ迷う身であると。そのように生死の業繫からできることのできない身、煩惱の身に「一切道俗もろとも」に「帰すべきところぞさらになき 安樂勸帰のころぞし 禪師ひとりさだめたり」と讃えられている。

如來の心は十方仏国浄土である。尽十方無碍光如來である。さとりは十方を尽しているといわれている。されど、日々の生活は対象次第で自由を感じたり、不自由を感じたり、喜んだり悲しんだりする十方有碍の煩惱海の中にある。その有碍の現実、此（穢土）の自覚、さ迷いの中に方向を得ていく歩みこそ、「彼の土」（浄土）西方の道である。つまり、信心の目覚めに立つ願生彼国住不退転の道といえる。

浄土は如來の願心莊嚴である。しかし、自力心の歩みにおいてはそのことが容易に知られない。自力の作心は清浄の世界に梯子を掛けようとする試みである。みずからの身がよく知られば天上の月に梯子を掛ける試みは必要ない。よく心を澄ませば、地上の水に月影は映っているという。求める立場が転回するのが他力といえる。そのようなことを曇鸞は淤泥の華にたとえている。泥の中にあつて泥をこえて咲く華は、泥を根として華を莊嚴する。私たちの分別、煩惱、貪欲にまみれた人間生活の中に発起してくる如來の願心莊嚴である。

その如來の願心莊嚴は、この世、三界を場所として三界を超えていく道である。清浄功德では、「觀彼世界相 勝過三界道」といわれている。勝過は超えることである。流転の因果を超え還滅の因果を成就する道である。三界を超える必至滅度の願の自覚である。そのような自覚内容を、曇鸞は「彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繫業畢竟じて牽かず、すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得」と示している。そして、その三界勝過の道は、人間の一心作願、正念觀察にあるのではなく、「正道大慈悲 出世善根生」といわれている。浄土は正道の大慈悲を正因とする出世の善根より生じたといわれる。人間の作願を正因とするのではなく、仏の大慈悲を正因とするのである。人間の作

願をこえ仏より起こされた大慈悲の志願に呼びさまされていく道である。如来の願心に一心正念の決定往生を得る道である。

二番目は、先に述べた「見阿弥陀仏」の内容である。仏の教化である「観仏」、智慧を得る方法を通して阿弥陀仏、「光明無量、寿命無量」の願、一切衆生を包んだところの仏の徳、仏の背景が知られたということである。

五

最後に廻向の二相についてである。『論』には、

云何廻向、不捨一切苦惱衆生、心常作願廻向為首得成就大悲心二故、
といわれている。その文を訳して、

廻向に二種の相あり。一は往相、二は還相なり。

往相は、己が功徳をもって一切衆生に廻施して作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめんとなり。還相は、彼の浄土に生じ已て、奢摩他、毗婆舍那方便成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道にむかえしむるなり。もしくは往、もしくは還、みな衆生を抜きて生死海を渡らさんがためなり。この故に「廻向為首得大悲心成就」とのたまえり。

といわれる。

このように廻向についての二種の相の了解がなされている。

五念門の行は、先に尋ねて来たように作願、観察が重要な門となっている。仏に作願する「観彼世界相」、「観仏本願力」の観察、つまり作願、観察の二門が中心になっている。その作願、観察が廻向門にくると、「一切苦惱の衆生を捨てずして心に常に作願す。廻向を首として大慈悲を成就することを得たまえるが故に」と示されている。そして、

五功德門のところでは「大慈悲をもって、一切苦悩の衆生を觀察して応化身を示して生死の園、煩惱の林の中に廻入し神通に遊戯して教化地に至る。本願力の廻向をもつてのゆえに。これを「出第五門」と名づく」といわれている。

善男子、善女人の作願、觀察の如実修行の道が、廻向の内容として如来の作願、觀察となつて展開してくる。そのところには作願、觀察の方向転換があるといえる。仏道において廻向が自力廻向としてしか考えられなかったあり方が、世親の仏道了解を通して、本願力廻向、如来廻向の道——つまり、仏道の「菩提心為首」（『安樂集』）の道が転じて、「廻向為首得成就大悲心故」の仏道が見開かれてきたといえる。

それは「見阿弥陀仏」、「阿弥陀仏を増上縁」となす本願の歴史であり、「閻浮提の一応化道」を超える道である。阿弥陀如来の廻向為首の自覚に往相、還相の二相が明らかかにされてくるのである。

『浄土論』の五念門の行は入出二門の形を内容としている。五念門の行は、入（自力）の禮拜、讚嘆、作願門と展開し、觀察の自利利他の行を満足し、出（利他）の門、廻向の利他の功德を得るという内容である。解義分では、二十九種莊嚴がすでに如来の願心におさまる浄入願心章から善巧撰化章のところに、觀察の「入」の中心がすべての人を浄土に生まれさせる善巧撰化の「出」として展開してくる。菩薩行を成就する自利利他の問題である。

善巧撰化章のところの『論』の文は、

何者菩薩巧方便廻向。菩薩巧方便廻向者、謂説禮拜等五種修行、所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便廻向成就。

といわれている。その文を釈して、曇鸞は「安樂浄土は阿弥陀如来の本願力の為に任持せられる」ところとして、次のように示している。

およそ廻向の名義を釈せば、いわく己が所集の一切の功德をもって、一切衆生に施与して共に仏道に向はしむるなり。「巧方便」は、いわく菩薩願ずらく己が智慧の火をもって一切衆生の煩惱の草木を焼かん。もし一衆生と

して仏にならざることあらば、我仏とならず。

そこでの「己が所集の一切の功徳をもって、一切衆生に施与して共に仏道に向はしむるなり」という、廻向を行ずる主体の菩薩は、先に述べたところの十地の菩薩ではなく、「阿弥陀如来の本願力の為に住持」される法蔵菩薩の功用のことである。そこに火燵ヒトコのたとえがだされている。火の箸で火をつけて草木を焼き尽そうとするとき、草木が焼き尽されないうちに木の箸の方がさがきに焼け尽きてしまうと。衆生の流転に終りが無いが故に菩提心にも終りが無い、衆生が無辺であるが故に菩提心も亦無辺であるという願いは人間の作願ではなく、仏が衆生を荷負したところの作願である。「己れが功徳をもって一切衆生に廻施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめんとなり」と。仏の作願が衆生を包んですべての衆生を仏の国に生まれさせたいという願心の目覚め、往相廻向のことである。そのように廻向を内容として作願が尋ねられている。

親鸞によつて、

如来の作願をたずねれば

苦悩の有情をすてずして

廻向を首としたまいて

大悲心をば成就せり

と讃頌されるところの仏道了解といえるだろう。

次に、

出第五門者、以三大慈悲一觀ニ察一切苦惱衆生、示三応化身一廻ニ入生死園煩惱林中、遊ニ戯神通ニ至ニ教化地一、以三本願力廻向一故、是名ニ出第五門一。

といわれる『論』の文である。

ここでは廻向の内容として「観察」が示されている。出第五門の廻向、還相廻向のことである。「大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察し、応化の身を示し」てくだされたといわれている。観察といえば浄土の觀察である。三種莊嚴を尋ねていけば、浄土は人間の苦界、流転の相の衆生を包んだ觀察である。穢土を包んだ浄土の觀察である。「生死の園、煩惱の林」の中に苦悩する衆生を浄土に生まれさせたいと穢土、無仏の国にはたらく仏、菩薩の願心のはたつきにほかならない。

そのように廻向を釈義して、曇鸞は二相のはたらきを尋ねている。往相廻向は仏の功德が法蔵となつてすべての衆生を「有仏」の国、浄土に共に生まれさせようという作願のはたらきのことであり、還相廻向は、仏の功德が穢土、「無仏」の国を包んですべての衆生を共に教化しようとい一切苦悩の衆生を觀察するはたらきのことである。そのように阿弥陀如来の本願の建立は、衆生の流転の終りのないところ、無辺の衆生の苦悩の尽きないところに往還の廻向の内容として、すべての人の仏になることを証している。浄土への門、往相の道は従如来生の菩薩、法蔵菩薩の願心の目覚めのことにほかならない。

そして、出第五門の文はについて、「本願力廻向を以ての故に、是を出第五門と名づく」といわれる。その本願力を曇鸞は積して、

「本願力」というは、大菩薩法身の中においてして、常に三昧にましまして種種の身・種種の神通・種種の説法を現ずることを示す。みな本願力をもって起こすなり。たとえば阿修羅の琴の鼓する者のなきといえども、音曲自然なるが如し。是を教化地の第五の功德相と名づく。

といわれている。

そこでの「大菩薩法身の中において」とは、釈尊を理想として、釈迦の応化身のごとく道を進もうと、因から果へ漸次に進んでいく菩薩の道が転じて、果から因への菩薩の道が見出されている。いい換えれば、仏の到達点から出発

点が見直されてくるのである。すべての衆生が仏ならざるを得ないという法身からの菩薩のはたらきといえる。そこは、釈尊の個人のさとり、悟道を超えて、釈尊以外の十方三世の衆生が包まれ、いかなる衆生も仏ならざるを得ないという人間成仏の歴史が、仏によって見出されている還相の道といえる。

その仏によって見出されている功德、つまり如来利他の不虛作住持功德を体とする菩薩のはたらきは四種の内容で表される。(一)不動応化の功德、(二)一念普照の功德、(三)無余供養の功德、(四)遍示三宝の功德である。

その内容は、「十方に遍して種々に応化して、凡夫の煩惱の泥の中に在って仏の正覚の花を生ず」とか、また「一心一念に大光明を放って遍く十方世界に至り、一切衆生の苦を滅除する」。あるいは「一切世界において余すところなく諸仏会を照らして大衆を供養し、恭敬し、讚嘆」するといわれている。そして、最後の、遍示三宝の功德のところでは「十方一切世界の無三宝處において仏・法・僧宝の功德の大海を住持し莊嚴」と示している。

そこには、「釈迦如来、閻浮提において一応化道ならくのみ」という仏道のあり方が転じ、阿弥陀仏の本願の歴史にたつ種々、無量の衆生のところにはたらく応化、教化地の道のことである。そのように廻向、往還の二相によって、この世、無仏の人類にかぎりなく仏がうみだされていく道が明らかにされたといえる。

南無阿弥陀仏の廻向に往・還の功德を賜わるのである。往相廻向とは願生淨土の目覚め、歩み、「入」（自利）の門の成就である。還相廻向とは、「出」（利他）の第五門の成就である。この世を超えたところの平等法身、大涅槃は、生死流転の外に描かれるのではなく、生死、流転を包みはたらくのである。生死の中にあつて生死を超える無碍自在の功德を得るのである。

そして、その「廻向為首得成就大悲心故」の仏道は、『論註』の最後に『大無量寿経』の文に照らし三願的証として示される。阿弥陀如来を増上縁となす念仏往生の願（第十八願）の功德が必至滅度の願（第十一願）、念仏往生の願の目覚めに正定聚の機を得る往相廻向の利益、「自利行成就」を明らかにし、還相廻向の願（第二十二願）は衆生を教化する

利益、仏の「廻向利益他」のはたらきである。その廻向の二相によって、速かに自利利他の無上仏道を成就する道は明らかにされている。

いまは、曇鸞の「他利利他の深義」、さらには宗祖によって「還相の利益は、利他の正意を顯すなり」（証卷）といわれる点については尋ねることはできないが、日頃考えるところを述べることで結びとしたい。